The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洋裁教育とデザイン教育 ： 杉野芳子を中心に
Author(s)	鈴木, 桜子
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 156-157
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52812
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洋裁教育とデザイン教育
── 杉野芳子を中心に ──

鈴木桜子／杉野服飾大学

杉野学園創立者，杉野芳子（1892～1978）は，日本の洋装化を担ったパイオニアの一人である。震災後の復興や近代化の波にのって，女性の装いは和服から洋服へと移り変わっていった。芳子は他の洋装推進者たちと共に洋裁教育を開拓していったその中心的存在として，また自らもデザイナーとして活躍した。

ニューヨークで洋裁技術を修得した芳子は，洋装を広めるために1926年（大15）にドレスメーカースクール（現ドレスメーカー学院，通称ドレメ）を開校する。当時，洋行帰りの女性や仕立て職人による洋裁教授所が相次いで開設された。その頃の代表的な洋裁学校としては，並木伊三郎，遠藤政二郎による文化裁縫学院（現文化服装学院），芦屋の田中千代服装学園（現東京田中千代服飾専門学校），そして桑沢洋子による多摩川洋裁学院（現桑沢デザイン研究所）などがある。なかでも文化とドレメは卒業生によって全国に連鎖校を広げていき，日本に洋裁ブームをもたらした。

洋装の歴史が浅い我が国において，芳子の洋裁教育は，まず裁縫技術と型紙製図法などの洋裁技術の習得から進められていった。製作課題は，部分縫いをはじめ，子供服から婦人服までの衣類各種，型紙は芳子考案のドレメ式原型が使われた。服のデザインは，芳子や教員たちがデザインしたものを生徒に与え，それを基に生徒が応用する方法が取られた。更にこのような洋裁教育は教育現場にとどまらず，「読売新聞」や「婦人界」，「主婦の友」「婦人公論」といった新聞や婦人雑誌に洋装記事や洋裁講座への寄稿，30を越える著書を出版していくことで，広く一般にも洋裁普及を進めていった。また，戦後，芳子監修の洋裁雑誌「ドレスメーキング」（1949創刊）を刊行し，洋裁記事だけではなく，アメリカン・モードやパリ・モードをイラストや写真で紹介して欧米の流行ファッションを取り上げ，日本での洋服の受容を更に高めていったのである。

こうして洋裁ブームと共に家庭洋裁は大きな広がりを見せていったが，一方で洋裁教育にも変化が見られた。黎明期にあった洋裁教育は，戦前までには洋裁技術の習得という段階から日本独自のデザイナー養成が求められていく。これは欧米ファッションの模倣からの脱却を目指したものであり，また家庭洋裁としての役割がひと段落ついたことを示していた。当時ドレメでは洋服のデザインをしていくためのデザイン教育は明確なかたちでは行なわれていなかった。そこで1939年（昭和14年）に芳子は「日本人の洋装は，日本人のデザイナーの手で，日本人向きにデザインされなければならない」とドレメに「デザイナー養成科」を設置する。これは日本で始めてのことであった。しかし，まもなく時代は戦局を迎え，1944年（昭19）にドレメは一時閉鎖を余儀なくされた。そして1946年（昭和21）にドレメは再開され，戦後，デザイナーという新たな職業が確立されていくようになる。

1947年，ディオールの「ニュールック」が発表され，世界のモード界に転機が訪れる。その影響は日本にも及び，1953年のディオール一行来日前後から，再びパリ・モードへの傾倒が見られ，全国の主な洋裁学校では，パリのデザイナーを次々と招聘して講習会を開

き，オートクチュールの技術を導入していった。その頃，芳子監修の洋裁雑誌「ドレスメーキング」では，「デザイナー」の言葉が頻繁に登場し，デザイナーを目指すための特集記事やファッションデザインコンテスト募集記事が誌面を賑わせていく。ＮＤＣ日本デザイナークラブが結成されたのもこの頃で（1948年），日本は洋裁ブームからデザインコンテスト，デザイナーブームへと新たなブームを生み出していった。

しかし，これらのブームは，日本の服飾教育が洋裁技術の習得からデザイナー育成へ向けられていく中で，曖昧な感覚と実践が先行していたことを示し，デザインのための理論的教育が遅れをとっていたことを浮き彫りにさせた。そこで芳子は1950年に「ドレスメーキング」で特集記事「デザイナーになる為の教室」（６号）を組み，以降，誌上で度々理論に重点を置いた関連記事を寄せていく。

ここで芳子の著作を一部挙げてみると

「流行色について」
（「DMJ 会誌」No. 5～，1936～）

「服飾デザイナーの要望」
（「DMJ 会誌」No. 9，1938）

「あなたはデザイナーの資格がおありですか」
（「ドレスメーキング」４号，1949）

「デザインの勉強の手引き」
（「ドレスメーキング」34号，1954）

「服飾デザイン入門」
（「ドレスメーキング」50号，1955）

「杉野芳子服飾デザイン講座　全17回」
（「ドレスメーキング」131号～，1962～）

『服飾デザイン入門』（鎌倉書房，1967）

これらの内容は，色彩・プロポーション・調和などのデザイン基礎，工業デザインも含めたデザインの流れ，服装史，素材，流行論といったものになっている。これら芳子の著作の他にも田中千代が『創意と衣服』（船場書店，1943）で理論書を出しているが，宮下孝雄『被服図案』（光生館），中田満雄『服装デザインの基礎』（㈲デザインセンター）らのテキストが出版され，服飾デザインについての理論書が広く手がけられていくのは1950年代以降のことであった。これはそれまでの洋裁教育とデザイン教育の乖離を示すものであった。

芳子を中心とする服飾教育は，洋装を普及させ，家庭洋裁から職業デザイナーへの橋渡しをするものだった。芳子自身がそうであったように，女性の社会的自立を洋裁という分野で開花させた点では，服飾教育においてひとつの達成を果たしたといえよう。しかし，デザイン教育という視点から見ると，それに対する徹底的な研究が果たされず，また洋裁教育とデザイン教育の違いが明確にされてこなかったために，真の洋裁技術者でもなく，また真のデザイナーでもない，曖昧な服飾専門家が生れていった。これは，現在の服飾教育の状況にも繋がる問題として捉えることができるだろう。